

自然と人間との共生

KOSMOS

第14号

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会



EXPO'90
FOUNDATION

こすもす

2024

秋



人はなにを
「住」に求めるのか？

人はなにを

「住」にもとめるのか？

衣食住シリーズの最終回「住」を考える。「住まう」は、人が寝食をはじめ、冠婚葬祭などの生活の礎の場に身を置くことをいう。本来、そこには庭や地域を含め、留まることの快適かつ健全な機能が伴うが、近代の人々の住まうはどうか。古典文学と現代の在り方から、人の「住」を探る。



国宝「納涼図屏風」久隅守景筆、江戸時代（17世紀）、東京国立博物館蔵
出典：Colbase

組子細工の麻の葉模様は、魔除けや無料息災の意味があり、産着の柄にも用いられた

住まいとは何か？

川本 二〇〇八年に四川大地震が起きた翌日、朝日新聞に掲載された写真に感銘を受けました。母親が亡くなった子どもを抱きかかえ、その手を握っている姿です。それが「住まい」の原点を見た気がしたのです。

なぜ、そう思ったかという点、私は神戸在住で阪神淡路大震災を経験しました。真冬の夜明け前、自分が安心して暮らしている家が一瞬にして壊れ、多くの人が亡くなった。そのためか、生と死を含めた総体を「住まい」として捉えたいという思いが強くなります。しかし、いまその死は、そこから外れてしまおうとしている。生

2

「巻頭特集」
人はなにを「住」にもとめるのか？

3 「対談」

住まうことの本質を考える

田路貴浩 × 川本豊

12 「探求コラム」

藤川美代子

安念幹倫

14

「私を育てた〈風と景〉」

鎌倉の純和風の住まいと

裏山の花壇が育んだ自然観

原由美子

16

「いぶきの輪っか」

住まいをめぐるヒトと動物

林良博

18

「近代学匠伝」

コスモス国際賞二〇二一年受賞者

ピーター・ペルウッド博士

21

「日本植物紀行」

南国に冬を知らせる「森の妖精」

ヤッコソウ

22

「協会事業紹介」

国際交流事業

ドーハ国際園芸博覧会

24

「日本の伝統園芸植物」

南天

審美と実用を兼ね備えた万能植物

対談

住まうことの本質を考える

田路貴浩 × 川本豊

京都大学教授

建築論研究者

きている部分だけが残され、住まいが死を受け入れられない。あるいはそういう家ばかりつくってしまっているのかもしれない。古典文学をテキストに研究していると、どうしても生と死の場面が多く出てきます。生から死までの間

が「生きている」ということなので、写真の生ける母と死せる子のつながれた手と手の「あいだ」が「住まい」を象徴していると思ったのです。

田路 私は、一戸の住宅というより、都市や地域のように、もう少し広い範囲で「住まい」を研究し

ています。都市デザインの分野になります。その視点から言うと、昔は病院などなく、デパートや映画館もないので、生まれるも死ぬも家の中で受け入れるしかなかった。

それが、社会の分業化が進み、それによって得られるいろいろな効率化や専門化のなかで、人間が専門分化することによって、文明が発達し、都市生活がより豊かになっていきました。そしていまに至っています。だから、現代の家というものを住戸単位で見ると、ご飯を食べて寝るだけの場所にな

っているかもしれませんが、もう少し広い範囲で見るときに、その集合が「家」になっているかどうか、私の関心の基本になります。その視点から調べていくと、地域全体で「家」になっているところと、そうならない場所があります。

川本 「家（イへ）」という言葉を見ていくと、「イ」は発語ですが、「へ」には、「ヘツヒ」（籠カマド）、「イホリ」といった意味があり、火が連想され生活そのものを表しています。発語の「イ」についても、日本文学者の土橋寛によれば、たとえば「イノル（祈る）」は、「イ」と「ノル（言う）」の組み合わせで、「イ」は元来、生命力や霊力を意味し、人ではない何かに対して呼びかけるのが「イノル」だと解釈できるようです。

いまは、古典文献のデジタル化が進み、言葉が簡単に検索できるようにになりました。まだ私の場合はアナログでしたが「いへ」という言葉を探すと、平安時代の『源氏物語』にも出てきますが、鎌倉時代の『方丈記』頃までは「家」



国宝「春日権現験記絵」鎌倉時代（1309年頃）、巻3第1段（上）と巻19第1段 皇居三の丸尚蔵館収蔵
本格的な大和絵技法による精緻な描写の絵巻が完全な姿で現存し、700年もの長い年月を経て、当時の風俗を今に伝える貴重な資料。森や山々も「住まい」の原風景として描かれる

「棲家」屋」が多く使われています。一方、「住まう」という動詞的な言葉を考えると、「住まい」の「すむ」は「澄む」「清む」「棲む」につながる。濁った水が、しばらくしたら沈殿して澄んでいく状態。つまり、古語としては、落ち着いてじっとした状態である「すむ」の意味が同根としてあります。

田路 ドイツの哲学者ボルノ（一九〇三〜九一）は、『人間と空

間』のなかで、「住まう」について、家と世間を分けて説明しています。家の周りが「世間」で、そこは無秩序や争いなどでドロドロに濁っていて、澄んでいない。そのなかでは安定して暮らしていけないので、石やレンガで囲んで中を守っていく。それが家です。日本の場合には硬い壁がなくって、垣をつくったり、建具を取り付けたり、寝殿造だと御簾を下げたり、几帳を立てたりします。何重にも

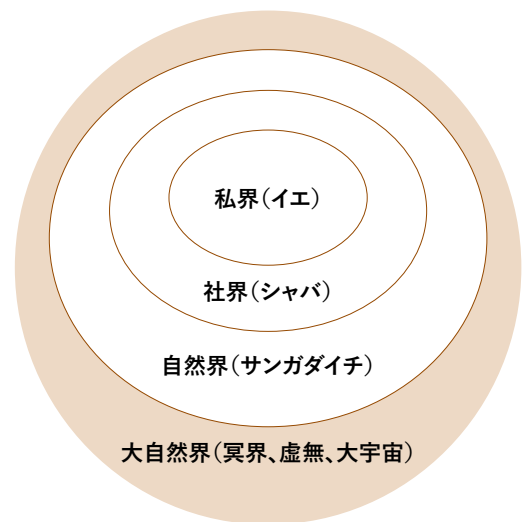
「奥」の語義は、「六（室）に「采」（たいまつ）を「井」（両手）でもった状態を示し、暗い室内を意味する日本独特の心性を表す言葉で、特定の場所を示す語ではないのです。この「奥」をキーワードに、看取りの文学ともいわれる『讃岐典

侍日記（上巻）を取り上げましたが、天皇の病床の間は、西対屋の中心にある母屋です。障屏具だけではなく、天皇の膝で仕切りを作るという象徴的な記述もあり、「奥」の重層性が明らかになります。田路 おもしろいのは、人の生死が発生するのが、「住まい」の一番中心になる場所だということですね。もつとも安定している場所で、人が生まれたり、死んだりすることが起きてしまう。人間にとって不安定なことが、奥の奥で起きてしまう。その逆転現象がおもしろい。

さらにそれが、外部から内部に、

濁っている状態から澄んでいる状態への単純な清濁のグラデーションにとどまらず、ど真ん中にくるとまたそこに穴が空いていて、その穴から濁っている外の世界の、さらに外側に出ていってしまう。要するに人間が生まれたり死んでいくという、もつとも根源的な自然状態にその穴が通じてしまっている。それは古代の日本の住まいのなかに——日本だけではないかもしれないですが——起こってきたことです。川本 さきほどの「奥」の空間性について整理しますと、特定の場所を示す語ではないということ、

図1 四界図



相対的な言葉で、極端に言えば、奥に辿り着くことはない。つまり奥と思われる所に行くとその先に奥があるという重層性です。もう一つの特徴が、時間性を含んでいるということ。それも将来という時間です。まだ自分が辿り着いていない時間ですね。

暗いというのは、また「冥い」とも言え、不可知の世界です。このように「奥」という言葉が、中世を頂点とした冥顕世界構造につながっていくことになる。『讃岐典侍日記』（下巻）では、故

院への回想場面が中心になるので、内在要因として身と心、外在要因として時間と空間、という四つの要素を選び出し、それらの組み合わせ・錯綜として時間のなかのバリエーションな「奥」を捉えようと試みています。

田路 川本さんの「奥」の研究に触発されて、図をつくってみました（図1）。これは、一番真ん中に家があって、その周りに社会がある。さらにその周りには自然界があるわけですが、図ではこの社会を、世界をもじって「社界」と呼



田路貴浩（たじ・たかひろ）
1962年、熊本県生まれ。建築家・教育者として「地球環境時代の都市・建築論の構築」を目標に掲げ、実践的な地域研究にも携わる。主な建築作品に「三輪山会館」（2019年）など。著書に『イギリス風景庭園』（丸善）、『増田友也の建築世界』（英明企画編集）など。
撮影：逢坂憲吾（pp. 5-6, 11）

んでみました。「界」は、英語で言えば「スフィア (Sphere)」です。中央にブライヴェートなスフィアがあって、その外側にソーシヤルなスフィアがある。そしてその外側に人間が知っている「自然界」がある。

ところが、我々は忘れがちなのですが、さらにその外側があるのです。大自然、あるいは冥界、ようするに人智の及ばない領域があります。死後の世界や宇宙の果てなど、わからない領域のほうが圧倒的に大きい。宇宙物理学の最先端では、人間が観測している宇宙の物質はそのわずか五パーセントにすぎないと言われています。すなわちほとんどが未知の世界です。そのことを私たちはすっかり忘れていたけれど、人間が知りえない「不可知の世界」というものがあるのです。でも、その不可知の世界に乗っかって私たちは生きていくわけです。

目に見えないものを見る

田路 わかりようもない領域が途

その境内に、阿弥陀堂をつくり、最期はそこで亡くなるのですが、死期を悟ると、道長は阿弥陀堂に移ります。死を迎えるための室礼として、広のお堂のなかに、屏風をめぐらして仕切り、そこに籠もって西を向いて御像を置いて拜む西方浄土です。

日常生活の場所である五大堂から、阿弥陀堂に移る際に回廊ではなく前庭を通って行きます。庭にある中島を通り、橋を渡って終の場所になる阿弥陀堂に入る。その道すがら自分がこしらえた庭の風景を目に収めるわけです。橋を渡るということは、異界に移ることもある。そういうことを経て、自分の死を迎える「場所」に移っていくのです。

田路 道長は、庭の風景を目に収めて橋を渡ったわけですね。眺めに関する言葉として、学術的には、客観的に計測できるものを「景観」、それに対して、文化的に意味づけられたものを「風景」としていますが、もうひとつ、ヴィジョン (Vision) という言葉があります。東日本大震災のあと、「失われた



川本 豊 (かわもと・ゆたか)
1950年、兵庫県生まれ。京都大学工学部を卒業後、設計業務等に携わりつつ、福井工業大学大学院で日本古典文学を通じた「住まうこと」の建築論的考察により博士 (工学) を取得。現在も同大学院市川研究室にて「建築論の京都学派」の視点から研究を進める。著書に『建築制作論の研究』(中央公論美術出版、分担執筆) など。

方もなく広がっているということはどうやって認識するか。宗教家は、例えば、禅で「無」と説いたりするように、いろいろな方法でそれを認識させようとしています。しかし、わかりやすく人間の世界に引き込んでしまうと、「わかっている世界」になってしまう。例えば、浄土、あの世の世界を認識したいと思い、浄土庭園などを作ってみる。でも庭園として作ってしまうと、もうわかっている世界になってしまうのですが、本当は、浄土庭園の向こう側に不可知の領域があると理解しなければならぬのです。

風景」について盛んに語られ、一方で「復興ヴィジョン」が至るところで議論されました。失われた風景の復興として「ヴィジョン」が策定されたのです。

そこで、このヴィジョンってなんだらうと疑問が浮かんできました。語源を調べてみると、英語やドイツ語、フランス語ともに「ここでない、アンリアルな視覚像」という意味です。「幻視」という宗教的な意味合いもあります。人間は目の前にあるものを見るだけで満足するわけではなく、それ以上のもを見たいと思う。それがヴィジョンということばで表されています。

川本 ふつうは風景をランドスケープ (Landscape) といいますね。ですが、そこには人は含まれていない。私は人との関係性を入れたかったのでシーナリー (Scenery) という言葉を使っています。人が入ってきて初めて全体の風景になるからです。

田路 英語の「ランドスケープ」は、もとはオランダ語で風景画を意味する「ランドスキップ」から

川本 冥顕論では、この世の世界を「顕界」、我々のいる世界とは違う世界を「冥界」と呼びます。この図には、私界、社界、自然界というエリアがありますが、ここまですが我々が知りうる領域で、その先のボーダー外の部分、知らない領域を知りたくなるわけですね。

田路 その外の領域を可視化しようとしたのが、夢窓国師などの石庭です。眼の前の自然の向こう側を悟るためには、草花や木、水は要らない。砂と石だけでよい。つまり、石と砂が、目に見えない向こう側の世界を象徴しているのです。それが、建物の中、例えばお寺であれば方丈の周りの石庭になっていたり、あるいはわび茶という「市中の山居」という考えが露地で取り入れられた。千利休は、町なかの暮らしのなかに、失われた自然をただ取り戻そうとして、山中のような自然空間を再現してみたのではなく、小さな自然を通して、その向こう側の領域を象徴しようと考えていたとする解釈もあります。



裏千家内 露地の中門 (京都市上京区)
写真提供：一般社団法人 今日庵 撮影：竹前 朗

派生した語です。風景よりも風景画が先でした。これがイギリスに渡ってランドスケープになり、ドイツに渡って「ランドトシャフト」、大地の景観、すなわち植生の眺めを表す地理学用語になりました。ですから、おっしゃるように人は含まれていないわけです。

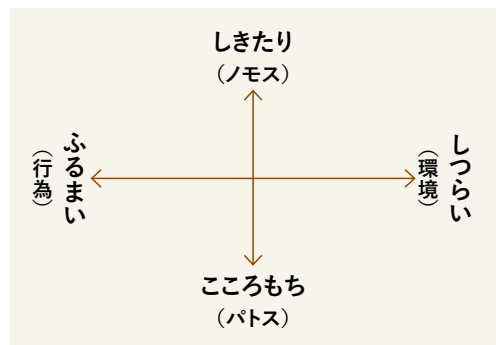
自然を詠む和歌の世界

川本 「自然」という言葉も解釈が

難しい。日本語では「しぜん」とも「じねん」とも読みますが、建築論的な視点からは、「自ずから然り」の意味を強調すれば「じねん」と言ったほうがよいかもしれません。「しぜん」というと、対象化したようになりますから。

田路 「じねん」としての自然と、石や草木などの自然物とを混同してはいけませんね。自然物は生々流転し変化します。「イヘ」の「イ」が表すような、物事を動かしてい

図2 ふるまいとつらい



く生成変化する生命的な力がある。それを古代のギリシア人は自然すなわち「ピュシス」(Physis)と捉えたわけです。また道元は、その見えない力の領域、自然界の外側、それを「清浄本然なる山河大地」と名づけ、自然物としての「山河大地」と区別したのです。

川本 「ピュシス」も捉えにくい言葉ですね。たんに「自然」でいいのでしょうか？

田路 私は「ピュシス」は、さきほど言った九十五パーセントの不可知の領域を捉える概念として理解すればよい、と思っています。家には窓がありますね。人は世界をどンドン仕切っていくけれど、仕切ると同時に外側の世界も見たいので、窓を開けて外を見る。その時に窓から見える庭がきれいだなとか、思うわけです。私たち現代人はそれぐらいしか見えないのですが、よくよく窓の外を見てみると、鳥や虫が飛んでいたり、陽光がキラキラと輝いているのを感じる。それは自然の働きです。知りえない何か、大自然の作用のようなものが感じられる。

うこともある。というようなことを研究されているのではないのでしょうか。

川本 日本の仕切りは、たしかに堅い壁ではなく、几帳や御簾といった脆弱なものです。「力弱い」とも表現されます。日本人の心性として、見たもの、見えたものは事実としますが、聞いたもの、聞こえたものは極端に言えばなかったことにできます。

例えば、『讃岐典侍日記』に、病床の堀河天皇のもとに政務で閑白が訪れる場面が出てきます。御側

現代人はそれをすぐ写真に撮って、言語化することはほとんどありませんが、川本さんが研究されているとおり、そうしたことは和歌や俳句に盛んに詠まれてきました。古来、日本人は詩にするスキルをもっていた。見えないものを見ようとするときには、スキルがある。方法がある。宗教的なものであれば、祝詞をあげるなどの儀礼によって、見えないものに触れようとしています。しかし近代以降、そういう宗教的な儀礼を家から追放してしまい、見えないものを見ようという行為がなくなってしまう。

川本 『萬葉集』以来、さまざまな形で自然が詠われてきました。住まいとの関連で例をあげてみます。

住みわびぬげにや深山の
まきの葉にくもるもすめる
有明の月(鴨長明)
やまかげの岩間をつたふ
苔水のかすかにわれは
すみわたるかも(良寛)

さらに近代になって、正岡子規

で看病していた長子(日記の著者)は、天皇の膝の陰、これも仕切りの一つですが、「単衣を引き被きて臥し」、すなわち、上衣をすっぽりと引き被りて我が身を隠します。長子は、ただ見えなくなっただけで、そこに居ることは自明ですが、慣習的に居ないと了解されます。これは図の「ふるまい」にあたると思います。やがて天皇が崩御した際に、内大臣が御遺骸に「御単衣取り寄せたまうて、引き被けまみらせ」ます。同じ「被く」という現象ですが、こちらは「しきたり」と考えられます。この図ではそれぞれの現象を四象限に、わかりやすくプロットできます。

家の対極としての旅

川本 「住まうこと」を考える上で、家、旅、漂泊という三つの状態を想定してみました。

まず、「家」について、福井に生きた幕末の歌人、橘曙覧の『独楽吟』を取り上げます。これは「たのしみは」で始まって、「○○のとき」で終わる形式で詠んだ和歌で、

は『萬葉集』を評価しつつ、『古今集』以来の伝統的な和歌や、俳句の革新を試みたことで知られている。その一つが現実写生の原理で、定型化されたテクニクというよりは、見たままの現象の素直な表現を求めたと言えます。

「ふるまう」と「つらい」

田路 もう一つ図2を書きました。これは川本さんの「奥」の視点による『讃岐典侍日記』などの分析を自分なりに解釈したものです。図の一方には「しつらい」がある。住まいには御簾が下がっているとか、几帳が立てられているとか、物の配置がある。もう一方で、人がどういふふう振る舞っているのかという行為、「ふるまい」がある。「しつらい」と「ふるまい」、ちょうど語呂もいいですよ。

川本 私は「住まい」の建築論という分野ですから工学系になりませんが、対象として、古典文学という言葉を主に扱っているせいか、どうしても文字の羅列になってしまいう傾向があります。図式化とい

日常生活や家族の幸せ、学問への態度などが五十二首の連作として詠み込まれています。自分の家族と一緒に、「藁屋」と名づけられたあばらやですが、我が家に住まう暮らしに悦びを見出しています。これが彼の生き方です。

たのしみは 艸のいほりの
藁敷き ひとりころちを
鎮めをととき

次に、その対極として、旅や漂泊があります。

まず「旅」は、家を出て、家に戻ることですから、家が前提にあります。かつて旅は命がけで、どこかで野垂れ死にする危険性も帯びた移動になります。鎌倉時代に書かれた『海道記』は、住まいのある京都に老母を置いて、五十歳の作者が鎌倉へ旅に出て戻ってくるまでを描いた自照性の高い紀行文です。著者は不明ですが、現代の「八十・五十問題」を彷彿とさせるように、家を出て、家(母)を想う作品です。

次に、漂泊、放浪という家を持

うことを常に意識はしているのですが、先ほどの図のようにひと目でわかる図をみると、なるほどと思ってしまうですね。

田路 川本さんは、「ふるまい」と「しつらい」の間で生じる、人びとのいろいろな心情や「ころもち」それを物語や日記から読み込んでおられます。とくに古代には、こうするべし、という「しきたり」がある。ここには誰が座るべきとか、所作はこうしなければならぬとか。ところが他方に、私的なころもちがある。

いま現代人はしきたりがどんどんなくなつて、あらゆる振る舞いが、人に迷惑をかけないかぎり許される。しかしかつては、ギリシア語でいう「ノモス」、つまり慣習や規律、規範があった。それに対して、個人のころもちが、しきたりにそぐわないことが多々あります。その軋轢のなかで物語が生まれる。「ふるまい」と「しつらい」の関係性は、「しきたり」によって規定されている部分もあれば、個人の「ころもち」によって、ふるまいがドライブされていくとい

っていない状態があります。幕末の俳人、井上井月(井上井月)は、信州伊那谷一帯を漂泊しながら、連句の会を開いたり、能書家であったので、芭蕉の句や詩文を襖などに揮毫して、その見返りに酒食と宿、いくらかの金銭をもらって生活していました。一説によると、一八四七年の善光寺地震で家族を亡くして、在所の越後長岡藩を出て、放浪生活を始めています。やがて師走の枯れ田に行き倒れているのを発見されます。哀しい漂泊の末路ですが、「落栗の座を定めるや窪溜り」の句が示すように、これが井月の選んだ生き様といえます。

山頭火が松山の草庵に落ち着いた一九四〇年に「濁れる水の流れつつ澄む」と詠んでいます。庵住と放浪行乞に明け暮れた山頭火でなければ到達できない境地だと考えられます。

田路 漂泊というのは、現代的な問題である移民、難民につながりますね。世界を見わたせば、自分の意志ではなく、やむを得ず家を離れている人々がたくさんいます。私のもうひとつのライフワーク



高瀬川沿いに並ぶバラック住居（1950年代後半）
柳原銀行記念資料館所蔵

に、京都の東九条という場所に関する研究があります。一九一〇年の日韓併合の頃から、朝鮮の人々が日本に移り住むようになり、特に戦後になると、東海道新幹線のトンネル工事に従事し、このエリアにバラックを建てて住み着くようになります。当時のルポルタージュなどを読むと、それは一日でできるくらいの粗末な家だったよ

うです。
こうした町の歴史を調べて知ったのは、人間というものが極限状態に追い込まれても、なんとかして住み着き、生き抜いていこうとするエネルギーです。「住まうこと」の根源に、きれいごとではない、生存欲求というものを感じました。

エコロジカルデザインへ

田路 冒頭で、家の機能が都市のなかに分散していったという話をしましたが、現代的にうまく再生している例として挙げられるのが、パリのマセナ地区です。鉄道終着駅の広大な線路敷を活用したまったく新しい市街地で、公園がうまく計画されています。

従来のフランス庭園はベルサイユのような人工的な庭園でしたが、最近ではイギリスの影響を受けて、自然の植生を再現するような庭園が増えてきています。マセナ地区にもそういう公園が造られ、隣接する大学の学生が寝転がって休憩したり、デートしたり、本を読ん

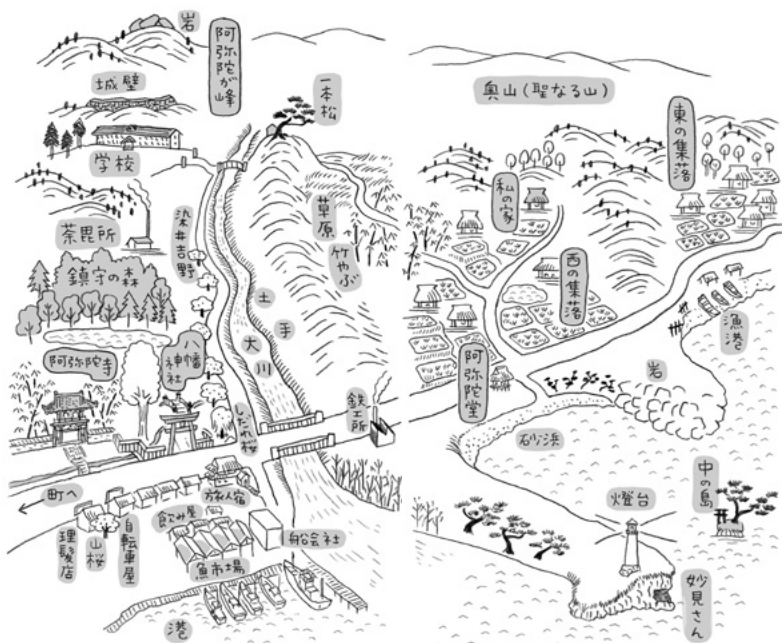
り、その向こうには連山（奥山）が描かれます。山の上にはご先祖さまがおられるという、今の日本人のメンタリティが大方そこに含まれているような。日本倫理想史学の大家でありながら、とてもわかり易いかたちで故郷の風景をヴィジュアル化し、文中には日本のしきたり、習俗も含まれています。

田路 かつて日本家屋には奥座敷があり、また家の縁側は自然を感じるうつつの場所でした。町中には神社があり、そして里山が広がり、さらに奥山には奥宮が建立され、一部は人が入れない禁足地とされました。家（私界）と町（社界）と山（自然界）がつながりながら、その至るところに、大自然界をのぞきみる穴があったのです。なかでも社界と自然界の境界となる里山は、町の生活を物質的に支えるだけでなく、人と自然界をつなぐ文化の培養床でもあった。生物と同じように都市も新陳代謝をしています。必需品を周囲の田畑や山林から吸収し、逆に排泄物を放出している。かつての田園



パリ・マセナ地区のグラン・ムーラン・アベ・ピエール庭園
撮影：田路貴浩

代的にアップデートしていくことができるはずだし、これから必要な方向性だと思います。
川本 佐藤正英氏の著書『故郷の風景』には、日本の原風景のようなものを、自らの「記憶のなかの故郷の風景」を思い出しながら、イメージで捉えたイラストがあります。阿弥陀堂や八幡神社があったり、鉄工所があったり、「私の家」の裏には低い山（里山）があ



イラスト：川口澄子
出典：佐藤正英『故郷の風景』ちくまプリマー新書、2010年

だりしています。そういう日常的な気持ちの良さとか、楽しさとか、そういったことを通じて、人々は何かしか自然そのものに触れているのでしょうか。

日本の桂離宮や修学院離宮、あるいは大名庭園では、回遊して散

策し、趣向を凝らした東屋でお茶やお酒を飲み、いろいろな遊びに興じながら庭園に佇み、四季の移ろいを感じることもできました。
公園や庭園と住まいの関係性について、日本人はすごく優れた文化を育んできましたが、それを現

地帯には工場が立地し、里山にはゴミ焼却場や産廃処分場が置かれている。近年、自然環境の保全と適切な利用の必要性からエコロジカル・ネットワークが唱えられています。社界と自然界の適切な関係への是正は急務となっていますが、それと同時に、自然界の外に人智をはるかに超えた大自然界が存在すること、冒頭の大地震や死もそうですが、そうした超越的

日常の領域への怖れを文化として再生することも必要だと思っております。環境問題の解決の根本には、こうした住文化の問題が潜んでいるのではないのでしょうか。

もそうですが、そうした超越的

対談が行われた梅小路公園（京都市）の朱雀の庭にて。建都1200年を記念し、京都の作庭技術・技法の粋を結集してつくられた、約9,000平方メートルの池泉回遊式庭園は、中央の池「水鏡」の周囲に築山や滝、野筋や花床などが配置され、歩みにつれて変化する景が見どころ。



水上の船に住まいつづける人々

藤川美代子

南山大学人文学部／人類学研究所准教授

水上は脱却すべき世界？

映 画『泥の河』（一九八一年、小栗康平監督、宮本輝原作）の一幕。「廓船」に住まう銀子が、川岸で食堂を営む信雄の母と風呂に入りながら、幼い頃、船の縁にしゃがみおしっこをしていたら河に落ちてしまったと語る。ふだんは大人びた表情で多くを語りぬ銀子が珍しく「きやきやきや」



1960年以降、九龍江の支流沿いに建てられた集合住宅と、小型の木造漁船。多くは一度出漁すると数か月は自宅に帰らず、夫婦や家族で船に寝泊まりする (2007年、筆者撮影)

と笑う印象的なシーンだが、映画を観る者は図らずも船上生活の危険や厳しさを思い知らされる。中国福建省南部の九龍江河口にも、船に住まい漁労や水上運搬をする人々がいる。「連家船漁民」と呼ばれる彼らは陸上の土地と家屋をもてず、船で漂泊するしかない民とされ、地域社会では多数派の漢民族とは別の異民族・賤民・貧困者などと思われてきた。中国には「行船走馬三分命」（船と馬に乗る者は三分の命しかない）という諺があるが、連家船漁民の暮らしもまた、自然災害や事故で命を落とす危険がつきもので、学校教育・医療・娯楽など陸上の施設にも接近しづらかった。

て一部の連家船漁民に分配するほか、周囲に港・編網場・造船工場・水産物加工場・小学校・診療所・商店を建設し、漁村として整備するといったものだった。折しも集団労働体制下にあったので、連家船漁民は船に寝泊まりして漁労をする前線勤務と、陸上の工場などで働き漁労を支える後方勤務に分けられた。

身も、家屋獲得という事態に、学校に通い工場や役場での仕事に就くという陸上の人々と同じ未来を託したはずだ。しかし、前述の漁村では二〇〇〇年代以降も連家船漁民の実に七十七パーセント以上が、船での頻繁な移動と長期的な寝泊まりを伴う水上労働に従事し、陸で育った若者たちも親の後をつぎ漁労や魚の運搬に参入した。陸上世界に出てみたはよいが、働いていた工場がリーマンショックで倒産した、三輪タクシーを始めたが思うように稼げないといった予想外のリスクに出くわすことになった。反対に、かつて悲惨だったはずの水上世界は現在、それらのリスクを回避するための空間、あるいは世界で需要の高まる水産資源を捕獲し、経済的利益を上げることで、魅力的で離れた空間として広がっているようだ。

リスクのある陸上世界、豊かな水上世界

これは、水上の漂泊民が陸上の定住民へと変化を遂げた歴史に見えるかもしれない。連家船漁民自

となみの散居村のカイニヨ

安念幹倫

となみ散居村ミュージアム館長

重宝されたカイニヨ

ウ ギイスの初鳴きで目が覚めた時、「春が来た」と私は実感する。そして、今年も来てくれたかと安堵する。初鳴きは「ホーケ」くらいでうまくない。どちらかと言えば下手だ。日を追うことに上手くなる。また安堵する。我が家の屋敷林に留まっていたのである。遠くから聞こえることもない。遠くから聞こえることもない。この時期この一帯の屋敷林が彼の縄張りなのであろう。

私は富山県西部に広がる砺波平野の田園に住んでいる。飛騨山地を源とし富山湾へと流れ込む庄川と、その支流によって形成された扇状地に広がる田園地帯である。この一帯では、屋敷林（カイニヨ）にすっぽりと覆われた家々が、距離をおいて点在する景観を目にすることができ。これを地理学で



砺波平野の散居村景観（展望台から）と剪定されたカイニヨ（スギ） 砺波散居村地域研究所蔵

は散居村、地元では散居村という。

カイニヨは直接家屋に、暴風や雪風が当たらぬよう風を受け止めたり、直射日光をさえぎることが主な役割である。スギ、ケヤキ、カシ、アテや竹などの高木と、カエデ、ウメ、クリやカキなどの中低木によって構成されている。その落葉や枝は燃料に、幹は増改築の材料に、タケは洗濯竿、稲架竿に

と使用でき、果樹は貴重な食用となる果実を提供してくれる。また、木の根本にはドクダミ、オオバコといった薬草や、フキ、セリなどの野草も生え、日常生活を支えてくれる。

一方で、カイニヨの規模や、植栽した木の種類や手入れによって、その家の格や家主の勤勉さが一目でわかることから、見栄もあり、カイニヨの維持管理は、手の抜けない大事な作業である。

存在が問われるカイニヨ

アルミサツシの窓や戸は、家屋

への風雨雪の吹込みを防ぎ、エアコンは快適な室内を提供し、ガスや電気による調理機器は、燃料となる落葉や枝を集める作業から人々を解放した。それによって風通しや日光を遮り、落葉処理を伴うカイニヨは邪魔ものとなり、家の建替えの時などに伐採され始めている。天狗が住む木と呼ばれた村一番の大木も伐採され、スギの苗木を植える萌芽更新の教えも、今は耳にしなくなった。

しかし、カイニヨは木陰を作り、やさしい風を生み、野鳥を休ませ、身近な生き物に住処を与える。維持管理は大変だが、鳥のさえずり、虫の音、ハルゼミからツクツクポウシまでの蝉鳴きが順次楽しめる。ある意味とても贅沢な環境とも言える。季節の音を奏でる屋敷林、そうでも言うて息子に渡そうと、私は思っている。

あんねん・みきのり
一九五七年富山県生まれ。専門は日本考古学。砺波散居村地域研究所員として、砺波平野の人口動向や農業動向を調査。共著に『21世紀の砺波平野と黒部川扇状地』(桂書房) など。

私を育てた 〈風と景〉

幼少期の記憶のなかの景色、人生のターニング・ポイントにまつわる思い出の場所、風の匂い、聞こえる音楽、ふと脳裏に浮かぶあがる「心象風景」……。大切な「風と景」について語っていただきます。

鎌倉の純和風の住まいと 裏山の花壇が育んだ自然観

原由美子 ファッションディレクター



鎌倉の自宅の庭（上）、裏山の東屋から小動岬（下左）を眺めていた

朝、起きるとすぐマンションの上階にあるリビングのガラス戸を開ける。激しい雨や雪の日は別だが、目の前の空を見て一息つき少しホッとする。窓の外は家や木やビルがある東京ならではの景色が拡がり、青空なら嬉しいし、雨が降りそうな曇天も、それはそれでよしとする。

最初は空気の入れ換えのつもりでやっていたことだが、ある時、鎌倉の実家の朝を思い出していた。鎌倉市のはずれ、腰越こしごえの小高い山を背にした高台に建てられた純和風の家だった。毎朝、洗面所で顔を洗った後に、茶の間の廊下あたりで、なんとなく海を見るのが習慣になっていた。見えるのは庭

の生け垣の先に広がる水平線。右側には松の木が数本、左側には小動岬こどうさきの松の木の上部だけがかたまりになって見えた。

水平線がくつきりはつきりしている日は、お天気がもつ。水平線がもやもやしている日のお天気は崩れがちで雨になるかもしれない。そんな話を小学生の時に聞いて以来、習慣になっていた。

東京の空では水平線のような予測はできないが、見上げると今日もよろしくと軽くご挨拶という気分になる。

純和風の住まいと 小造な洋風への憧れ

東京でのひとり暮らしを始めた

のは一九七〇年代の始め、二十七歳の時だった。以来、スタイリッシュトとして仕事漬けの生活をコロナの少し前までずっと続けていた気がする。父も母も元気で、その鎌倉の家がある間は、正月以外にも時間があれば帰っていた。そんな家も今はもうない。

東京暮らしを始めた頃の私は、コンパクトな洋風の空間への憧れが強く、小造な快適さを求めている。シンプルな日本家屋の美しさ



障子を通して柔らかな光が入る部屋 写真：木寺紀雄

は十分にわかっているつもりでも、実際に暮らしていると問題は山積みだったからだ。特に実感していたのは朝晩の雨戸の開け閉めに始まり、家中の障子の張替え、夏にはいっせいにその障子はずし、すだれに替えるという手間の煩雑さなど。母とお手伝いさんの作業を手伝いながら、重労働だと思われるばかりだったのだ。年を追うごとに、その手の作業は簡素化されていったが、一方で和風とも洋風とも言い難い家具や、電化製品が増えていき、なんとなく雑なとか和洋折衷で曖昧な感じが目につき始めた時代でもあった。便利で楽なのは無論嬉しいが、割り切れない気分が過ぎていた気がする。そんな思いとは別に、裏山（家の後にあつた山を家族はそう呼んでいた）の存在は純粹に懐かしく良い思い出で、大人になるまでの年月をこうした環境で暮らしたことを今更ながら感謝している。

裏山の花壇と 独り歩きへの思い出

普通の散歩のように歩いて頂上

の東屋あづまやまで登り、すぐひき返してくると三十分くらいで戻れただろうか。中腹に「花壇」と呼んでいた平らな場所があり、春には木の花が咲く。木蓮、雪柳、小手毬、連ぎょう、蠟梅ろうばいなどがいっせいに咲くが、切り花にはせず、そこに咲くままを見るのが父の流儀だった。私はと言えば、その花壇へ行く手前の少し開けた場所に、冬いっせいに咲く野生の水仙がお気に入りだった。正月に帰省すると沢山持ち帰り、大きな花瓶に無造作に入れて、香りと共に長く楽しめたのだ。

高校生くらいまで、時間があるとき、その山で小犬と散歩したり、吾亦紅われもこうを見つけたりと、ひとり歩

きの気ままさを気軽に楽しんだのは、懐かしいばかりでなく、今あの山があつたらとふと思う。大した目的がなくても、気分がよければ歩きたくなる現在の私の原点なのかもしれない。

一九七三年にスタートして四十年近く続けたパリコレ取材の折にも、時間的に余裕のあつた初期には実によく街を歩いていた。ゴチャゴチャしているのではないが整然としているわけでもないパリの街。親しみやすい気楽さに慣れた頃、ふとした街角で自分の部屋に障子を入れようと思いついた。あんなに面倒だと思っていたはずなのに。今ではすっかり馴染んで気に入っている。

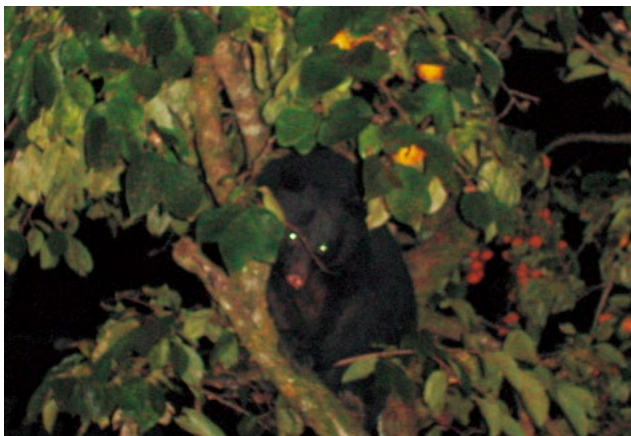


はら・ゆみこ
慶應義塾大学を卒業後の1970年に『アンアン』の創刊に参加。1972年よりスタイリストの仕事をはじめ。以降、『婦人公論』『クロワッサン』『エル・ジャポン』『和楽』など数多くのファッションページを担当。父は著述家の原奎一郎。著者に『原由美子のきもの暦』『スタイルを見つける』など。

住まいをめぐるヒトと動物

地球上では、さまざまな動物植物がたがい助け合い、利用し合いながら生命を育んでいます。私たち人間もその環を形成する要素の一つです。生きものどうしの連環、そして、そこに関わる人間の役割がつくる〈輪っか〉について語っていた、サイエンス・コラムです。

林良博 東京大学名誉教授



人家の柿の木に夜間出没したツキノワグマ（2004年、兵庫県香美町） 撮影：田野真吉 協力：東中国クマ集会

人の住まいを利用するのは人やペットだけではない。ツバメのように軒先に営巣し、子育てをする野生動物はおおむね歓迎されるが、アライグマのように屋根裏に営巣し、夜中に走り回るような来客は嫌われ者である。

どんな野生動物が人の住まいを利用するかは、地域によって異なる。いまから十七年前の二〇〇七年、人と野生動物の調和のとれた共存を目指すために、兵庫県は丹波市青垣町に森林動物研究センタ

ーを設立した。同センターの名誉所長（京都大学名誉教授）の河合雅雄先生からの依頼で、私は所長に就任し、現在は名誉所長を拝命している。

研究センターの運営会議・研究報告会に出席すると、兵庫県のみならず全国の「人と野生動物の軋轢」に関する状況を知ることができる。二〇二三年は多数のクマが集落周辺に出没し、全国で二百九十名の人身被害があり、五千六百五十頭のツキノワグマと、千四百

二十二頭のヒグマが捕殺された。今日では、クマの出没は全国各地にもおよび、庭に植えられている柿の木にクマが登って柿の実を食べている光景や、あたかも住居を覗き込む不審者のような光景もしばしば見られるようになった。そのため兵庫県をはじめとして、クマとの軋轢を減らすために、庭に植えられた柿木の伐採を奨励する地方自治体も少なくない。

とつに、本来の生息域である森林内の食べ物がないようになったことが考えられる。私が同研究センターの所長時代、ツキノワグマをシンボルに大型野生動物の保護を謳っていた日本熊森協会は、山奥にドングリを撒くなどの活動をしていた。残念ながら解決にはほど遠いと予想していたが、現状をみるかぎりその通りとなった。

樽は森の中へ

それでは適切な解決策はあるの

か？「コスモス国際賞」を二〇〇六年に受賞したインド科学研究所のラマン・スクマール博士が、ゾウと人との軋轢を回避することを目的に実施した「緑の回廊づくり」と酒樽の集落外設置」は、示唆に富んでいる。

インドの野生ゾウは、毎年保護区から他の保護区に移動するため、緑の回廊は大きい役立った。しかし、一部のゾウが回廊から外れて集落に侵入し、村の犠牲者は年間五百人にもおよんだ。スクマール博士らの調査で、人家内に置かれ

た酒樽が目当ての「酒好きのゾウ（特にゾウ）」の存在がわかり、「酒樽は人家内ではなく、森の中に置くように」と指導し、その結果、集落への侵入が激減したという。

私は博士の東京での受賞講演の司会役を務めたので、休憩時間中にそのような「粋な計らい」の裏話を聞くことができた。一方、日本のクマと人の軋轢回避では、残念ながら「粋な計らい」とは言えないが、少なからぬ地方自治体が人家の庭に植えられた柿の木の伐採を奨励しているのは、その一例だろう。

しかし正岡子規の「柿くへば鐘が鳴るなり 法隆寺」は、たとえ法隆寺に行ったことがない人も秋の深まりを感じさせる名句で、柿の木の伐採は多くの日本人にとって辛いことではある。

スクマール博士が提唱した「酒樽の集落外設置」を、DMG森精機の広報誌『つながり』に紹介したところ、新潟県の読者から「地元の新聞で、家の周りで火を使うとクマ避けになると親から教わったという投書を読んだが、たとえ

火そのものが見えなくても、嗅覚が鋭い動物たちにおいて気付くだろう」と書かれた手紙をいただいた。たしかに、昔は野生動物対策に火を焚いたし、いまでも山登りでは、沢筋でクマを見かけたら、煙を嫌うので火を焚くのが有効とされていることなどから、読者の意見には大いに賛同できる。一方で、今の日本では火事にならないよう、火の使用禁止を徹底する「やり過ぎ」があり、SNS社会がそれを助長しているため、クマよけに火を使うことは難しい。

学習能力への危機感

クマが人を襲うのは、突発的な遭遇や、子連れの場合が多いことが知られている。安全性を確保しながら先祖代々の知恵を生かす方策として、中山間地の山道を登下校する際に、子どもたちが元気に歌を歌ったり、笛を吹くのは、音に敏感なクマとの「予期せぬ遭遇」を避けることを期待してのことである。

しかし近年、六甲山付近でインシシが買い物帰りの女性を襲って

食品を奪うという事件が多発しているように、学習能力が高い哺乳類は油断ならない。お腹を空かせたクマが、従来とは異なる行動をとる危険性を排除できない。

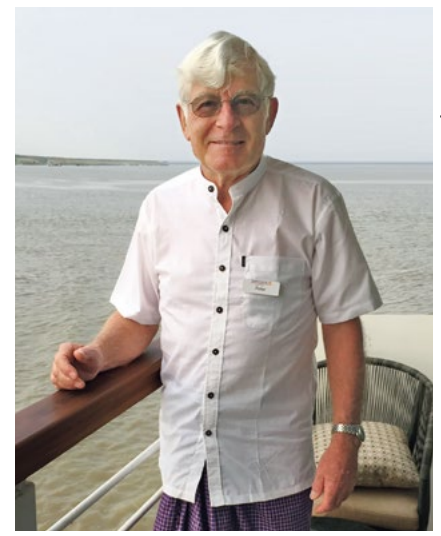
南北に長い日本では、北にいくほど動物が大型化する「ベルクマンの法則」が、クマやイノシシに当てはまる。動物は自分の身体の大きさを知っており、自分より小さな個体を襲うことがあるので、北陸以北の大型哺乳類にはとりわけ注意を要する。一方で動物を神やその使いとし、崇め、付き合ってきた共生の在り方を、今一度考えてみたい。



コンポストを覗き込むツキノワグマ
出典：農林水産省『野生鳥獣被害防止マニュアル（関連制度編）』



はやし・よしひろ
1946年広島県生まれ。解剖学者、獣医師。国立科学博物館館長、東京大学総合研究博物館館長、山階鳥類研究所所長などを歴任。専門は動物資源科学。



ベルウッド博士、2016年

コスモス国際賞二〇二一年受賞者

Dr. Peter Bellwood

ピーター・ベルウッド博士

ピーター・ベルウッド博士は、オセアニアや東南アジアにおける新石器時代の暮らしを研究してきた考古学者です。博士は、農耕が地球上のどこではじまり、いかにして世界中にひろまったのかという疑問に取り組み、考古学と言語学・人類生物学の学際的研究による「初期農耕拡散仮説」を提唱し、農耕の起源と世界各地でみられる初期農耕民の拡散の過程を明らかにしました。また、その研究成果をまとめた著書は、多くの国・地域で翻訳出版されています。

ピ

ーター・ベルウッド博士は、ケンブリッジ大学に学び、一九八〇年に同大学院で考古学の学位を取得。また、一九七三年からはオーストラリア国立大学で教鞭をとり、二〇〇〇年から二〇一三年は同大学の考古学の教授として、現在は名誉教授として、研究および執筆活動を継続されています。

博士は、ポリネシア文化が形成された過程の考古学的究明と、オ

ーストロネシア語族（台湾から東南アジア島嶼部、太平洋の島々に広がる語族）の人々が移動した軌跡を、考古学、人類学、言語学などの専門家との共同研究によって、人類の拡散が、初期食料生産者の移動・拡大に密接に関係していたことを明らかにしました。

そして、農耕の拡散には人間の移動が伴っており、人の移動とともに言語も拡散していくとみることで、農耕の拡散と言語の拡散とを

かさねあわせて考察する方法を創出し、「初期農耕拡散仮説」として提示したのです。

地球的な視野から考古学を切り拓く

博士は、人類が、約百三十万年前にジャワに到着したホモ・エレクトスやホモ・フローレンシスから現生人類に至るまで、島嶼部にも移動して適応してきたことに注目し、主として東南アジアの島嶼

【コスモス国際賞】地球の航路を探る

「自然と人間との共生」のため、統合的視点により環境と生命体・生命体同士の相互の作用等を研究した業績に与えられる「地球生命学」ともいうべき国際賞で、これまで30回を数えます。

- 受賞のポイント
- ◎共生の理念の形成、発展に寄与すること
 - ◎地球的視点に立ち、長期的な視野をもつこと
 - ◎総合的な視点での研究や活動であること

最初のアメリカ人は日本発の可能性？

コスモス国際賞を受賞した直後の二〇二二年八月に、博士の最新刊『五〇〇万年のオデッセイ』が、プリンストン大学出版局から出版されました。アフリカの最初の人類から、大陸移動、農耕の誕生による人口の急増に至る人類の進化の物語を、考古学、生物学、言語学などを統合し、魅力的に描き出した本書は、二〇二四年に邦訳版が出版されました。また、トルコ語でも出版され、さらに繁体字中国語、簡体字中国語、インドネシア語への翻訳も現在進行中です。



ディアン・バル岩陰遺跡にて発掘チームのメンバーと西カリマンタン州（ボルネオ島）にて、2014年

本書の特徴は、前述の通り、これまでの類書にはなかった言語学からの知見が取り入れられたことですが、もうひとつ特筆すべきは、これまでほとんど触れられなかった日本について、二つの節を設けて言及していることです。ベーリング陸橋（氷期にアラスカとシベリアの間に存在した陸地）を渡ってきた「最初のアメリカ人」が、日本発の可能性もあるという箇所には、ワクワクさせられます。

この意見は今でも強く支持されている。過去一万年の人類の先史時代には、地球上の人類の人口が大きく増加し、その人口が移動を通じて自然界に与えた影響も大きくなっていく」と自信をもって語っています。

部における考古学・古人類学的事例を用いてそれを明らかにしました。また、五万年前の農耕開始以前のホモ・サピエンスの移動、および南中国からのオーストロネシア語族の人や言語の移動などにも言及しています。

このように、博士はポリネシア文化の形成に関する考古学的研究を出発点にしながらも、言語学や人類生物学の知見を取り入れた学際的な研究方法で、地球的な視野から人類の移動と農耕の拡散との関連を説き、自然と人類とのかわり方の研究として、新しいアプローチを切り拓いたのです。



イースター島ラノ・ララクにて、1975年

ヒト科、現生人類（ホモ・サピエンス）、世界の主要な農業社会と言語族の起源に焦点を当てた本



『500万年のオデッセイ』河合信和訳、2024年、青土社



監修 村上哲明

南国に冬を知らせる「森の妖精」 ヤッコソウ

日本列島には約5,000種類の在来植物があるといわれていますが、開発や乱獲、外来種の侵入や気候変動などの影響で、その生育地や個体数は減少しています。花博記念協会は、こうした在来植物の現状を調査し、植物本体を採取することなく動画で記録しました。今では生育していない、失われた地域もありますが、その成果は「プラント・フォト・ハンティング」として、協会ホームページで公開しています。このコーナーでは、貴重なデータの中から、特徴的な種を取り上げて紹介します。

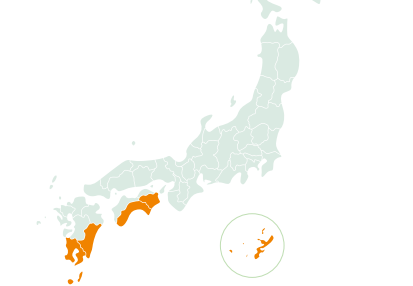
*学会や展示会などへの動画（DVD）の貸し出しもしています。 <https://www.expo-cosmos.or.jp/main/pph/index.html>



群生するヤッコソウ（種子島） 撮影：邑田仁

学名： *Mitrostemon yamamotoi* Makino
分布： 四国（徳島県・高知県）、九州（宮崎県・鹿児島県）、沖縄、東南アジア
開花期： 11月

日本(国内)の分布



シイの根から出るヤッコソウ（屋久島） 撮影：邑田仁

ヤッコソウはシイ類などの根に寄生する多年生の被子植物です。葉緑素をもたず、光合成機能を失って全面的に吸収栄養に頼る全寄生植物で、十センチにも満たない肉質の花茎、五〜六対の大きな鱗片葉、頂端につける一個の花、すべてが乳白色から淡いピンク色をしています。山地林内のスダジイやツブラジイの根に寄生して群生しますが、発生する場所は温暖な地に限られ、日本では徳島県が自生の北限です。徳島県海部郡海陽町の鈴が峯、宮崎市内海、鹿児島県日置市東市来町のヤッコソウ発生地は国の天然

記念物として保護されています（内海は特別天然記念物）。開花期は十月末から十一月頃で、薄暗い森の中で落ち葉の下からひよっこ顔を出し、両手を広げているような愛らしい姿は「森の妖精」と呼ばれることがあります。花は両性花で、はじめは帽子状のおしべの筒をかぶっていますが、雄花期が終了するとそれが抜け落ち、白っぽくて丸みのある柱頭が現れて雌花期となります。花の下にある鱗片葉の付け根に蜜がたまり、それを吸いに訪れる昆虫や小鳥によって受粉が行われる仕組みです。

ヤッコソウは高知県土佐清水市で一人の中学生によって発見されました。教師の山本一がその標本を牧野富太郎博士に送り、新種であることが確認されたのです。一九〇九（明治四十二年）、博士は山本の名を付した学名でラフレシア科の新属新種「ヤッコソウ」を植物学会誌に発表します。（のちに新科ヤッコソウ科を創立。和名は群生する様子を大名行列の奴の練り歩く姿に見立てたものです。当時も今も、新科名を定めるといってはめったになく、牧野博士にとっても日本の植物学界においても非常に名誉なことでした。



2024年4月、ベトナム北部ゲアン省コン・ダットの先史時代の貝塚（紀元前3500年頃）の調査。右から、ベルウッド博士、フィリップ・パイパー博士（オーストラリア国立大学）、ラム・ミー・ズン博士（ベトナム国立大学）

ベトナムでの発掘調査と飽くなき探究心

現在、博士は、ベトナムやオーストラリアの同僚とともに、ベトナム北部への食料生産集団の最初の拡散を考古学的発掘によって再現する考古学的プロジェクトにも携わっています。この伝播は約五



妻のクロード・モリスと、大阪、2022年

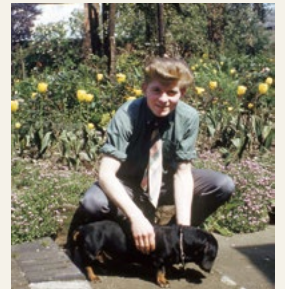
千年前に始まったと推測され、現在の中国南部から出発し、家畜化された豚や犬とともに稲作や雑穀栽培をもたらした人々の移動が関係しており、この集団は、今日、中国南部や東南アジア大陸の大部分に居住するクラダイ（またはタイ・カダイ）族やオーストロアジア語族（クメール語やベトナム語を含む）の最終的な祖先となったと、博士は推察し、調査に取り組んでいます。八十一歳の誕生日を迎え、博士の研究と執筆への意欲が衰えることはないようです。

叡智の人の足跡

1943年、ベルウッド博士はイギリスのレスターで生まれました。幼少の頃、両親にプレゼントされた書籍などから、化石に興味をもつようになります。17歳のときに、考古学者になりたいと一念発起し、奨学金を受けて、ケンブリッジ大学のキングスカレッジに入学します。大学でヨーロッパや北アフリカ諸国での発掘調査に参加するなかで、ホモ・サピエンスの種の進化や移動に関して強く興味をもつようになります。特に、太平洋の小さな島々に点在するポリネシア人の移動がどこからなぜ始まり、どの方向に向かったのか、またそれはどの期間に起こったのかという疑問をもち、その答えを追い求

めるため、1967年にニュージーランドに渡り、オークランド大学の講師に就任。1973年にオーストラリア国立大学講師に就任。名誉教授となった今日まで、同大学の考古学分野の教員として研究や学生の指導にあたってきました。また、執筆活動にも積極的に取り組み、『農耕起源の人類史』（邦訳版：2008年、京都大学出版会）はベストセラーになるなど、書籍を通じて、世界の研究者や社会に大きな影響を与えてきました。その一方で、考古学者として自ら多数の発掘調査を手がけるなかで、言語学、遺伝学、人類学、植物学など、専門領域の枠を超えた学際的研究を展開します。農耕起源の

人類史の解明という壮大なテーマに挑んできた博士の周りには、常に多くの研究者が集い、特にアジア地域における多数の考古学関係者との絆は、博士の「人類拡散の物語」が今後もさらに深化する原動力となっています。



レスターの自宅の庭で、愛犬ボーイと（1962年、19歳）

国際交流事業

力

「国際園芸博覧会」は、砂漠化を抑制し、持続可能な環境を確立するための解決策を提示することを目的に、「緑の砂漠、より良い環境」をテーマに掲げ、さらに四つのサブテーマ「最新の農業」「テクノロジー」とイノベーション「環境意識」「持続可能性」が設定されました。花博記念協会は、二〇二三年十月十九日〜三十一日の約二週間、屋内ブースに「花と緑のかけはし」をテーマにした、フラワーアレンジメントの展示を行いました。

中東の趣に溢れた
広大な会場と街の賑わい

会場は、カタールの首都ドーハのアルビッドパークで、その面積は百七十ヘクタールですから、鶴見緑地で開催された花の万博の約一・五倍以上の広さです。会期は、二〇二三年十月二日（月）〜二〇二四年三月二十八日（木）の百七十九日間、七十七か国の参加の

ドーハ国際園芸博覧会

中東・北アフリカ地域で初めて開催されたA1クラスの国際園芸博覧会「二〇二三年ドーハ国際園芸博覧会」に参加しました。花博記念協会は、日本国政府出展に参画し、屋内と屋外のそれぞれの出展に協力するとともに、フラワーアレンジメントの展示を行いました。また、今回の二〇二七年国際園芸博覧会に向けてシンポジウムを開催します。

横浜国際園芸博覧会と
園芸博の新たな方向性

と、入場者数は、目標の三百万人に対し四百二十万人。ドーハ国際園芸博覧会は、屋中の気温が高いため、人の出は気温が下がる夕刻以降というものでしたし、中東ならではの木々や建築物が並び、これまでの園芸博覧会とは趣が違いう特徴的なものでした。また、会場近接地には、様々なお店が並ぶ巨大な「スーク・ワキーフ」という市場がありました。博覧・展覧の源は、街道や市場の交流とも言われていますが、まさにこの市場はそれを感じます。お土産品や日常雑貨をはじめ、見慣れない香辛料や中東での人気ペットの小鳥や猛禽類を扱うお店もありました。

当協会理事で日本造園建設業協会の和田新也会長によると、フロリアード（オランダでの国際園芸博覧会）は、一九六〇年を皮切りにこれまで七回開催されてきましたが、二〇二二年のハイレマール国際園芸博覧会以降陰りを見せ、コロナの影響が大きかった二〇二二年のアルメーレ国際園芸博覧会は盛り上がり欠けたそうです。二〇三二年の開催は決まっておらず、今や七〇年余にわたり開催されてきたフロリアードの灯は消えようとしています。代わりに、中国をはじめとしたアジアでの国

カタールの最大都市ドーハの会場



際園芸博覧会の開催が増加していますが、これは一九九〇年の花の万博、一九九九年の昆明花博（中国）、二〇〇〇年の淡路花博、二〇〇四年の浜名湖花博などの成功によるものだそうです。

「二〇二七年国際園芸博覧会」は、今後の園芸博の新たな方向性を日本発で示す意味で、大変重要なものになると思います。花博記念協会は、令和六年度から、二〇二七年国際園芸博覧会協会と共に、日本人の自然観や花や緑を求める根源的な想いを探るシンポジウムを開催します。

「ものあはれ」の心にアプローチする年一回計四回のシリーズ、どうぞ楽しみにしてください。



協会によるフラワーアレンジメント展示

古来より日本人は花や緑を生活に取り入れてきました。万葉集には百六十種もの植物が謳われ、調度品や着物の柄になり、さらに山の花を見て農事時期を知るなど、自然とともに生きてきました。



日本の屋外展示

編集後記

この夏は、連日、熱中症アラート発動が報じられ、エアコンがなければ人類絶滅などの書き込みもネットで見られました。今回、対談を行った京都の梅小路公園は、美しい日本庭園が整備されていて、まさに「庭屋一如」。建物から続く庭、そして背景へと、全てが調和した生活空間であると感じます。四季を愛で、寒暖と上手く付き合ってきた日本人の自然観。日傘男子デビューをした私ですが、緑の効能はそれにも勝ります。(花博記念協会S.M.)

『KOSMOS』の誌名にこめた思い

本誌のタイトルは、COSMOSではなく、あえてKOSMOSとしています。どちらも意識・心の領域をも含めた「秩序と調和の宇宙」を意味しますが、真の共生の在り方を探る本誌として、古代ギリシアの哲学者たちが自然科学を論じたときに用いたKOSMOSを使うことで、人類の本質的課題にアプローチしたいと考えています。

南天

審美と実用を
兼ね備えた
万能植物

常緑の葉と赤い果実の色彩の妙で、冬の庭園に彩りを添える南天。古典園芸植物として愛でられるその繊細な葉芸もさることながら、縁起物、薬用など多種多様な実用にも供されてきた長い歴史にも矚目すべきものがあります。今も残る日本人の暮らしの風習に密接に結びついてきた植物です。

ナンテンはメギ科の1属1種の常緑低木で、日本列島では中部以南の温暖な山林の林床（地表面）で見られます。原産地は中国で、江戸時代には日本のナンテンと大陸産のナンテンの変わりものが注目されるようになりました。園芸植物として、江戸時代から明治にかけて百を超える園芸品種が作り出されました。これらの品種は現在でも錦糸南天など一部が古典園芸植物として保存栽培されています。

南天は、その色鮮やかな実や、葉の斑なども観賞されますが、さまざまに変化した葉芸にもっとも重きが置かれます。その種類は「錦糸」「筏」「奴」「千本」「棒」「鶴」などで、これらの芸を、樹形の変化や色彩と併せて観賞します。

暮らしの木として

和名「ナンテン」の由来は、中国語の音読みです。「南天」は南天

竺（五天竺のひとつ。南方インドのこと）からの渡来の意味で、南天竺とも、冬に目立つ赤い果実から灯火を連想して南天燭とも書きます。この音読みが「難転」に通じることから「成天」とも呼ばれ、日本では古くから家庭円満と願望成就の吉祥にちなむ縁起木とされてきました。人々は山野で採集してきた南天を魔除け、厄除けとして住まいの門口や軒下などに植えました。また、厠の近くに植え、その葉を手水の中に入れて手を清めました。南天は日々の暮らしに取り入れられ、祝事の床に活ける、重話などの進物にその葉を添える等の風習が生まれました。

また、乾燥させた果実は南天実といい、咳止めの伝統医薬として利用されています。

庭木として植栽が始まったのは平安時代のころに遡ると考えられています。文献で確認できるのは鎌倉時代の『明月記』（藤原定家の

日記）が最古で、寛喜二年（一一二三〇）に中宮権大夫が庭に南天竺を植えたことが記されています。その後、南北朝から室町時代には茶道の興隆とともに茶庭に欠かせない木となり、生け花の材料にも多用されるようになっていきました。

【参考文献】柏岡精三・萩果樹徳「絵で見る伝統園芸植物と文化」一九九七年



[右] 南天の実
[左] 伊藤若冲自画自刻『玄圃瑤華』より「芭蕉・南天」、1768年、東京国立博物館蔵 出典：Colbase

表紙の解説

「栗皮茶 くりかわちゃ
紅檜皮 べにひはだ」

栗の実の皮のような暗い赤茶と、紅がかつた檜皮色。檜皮はヒノキやスギなどの樹皮のこと。どちらも深めの赤褐色で、江戸時代に流行した。紅を含ませて「皮」に似せた色調が秋の深まりを思わせる。
「写真」麻の葉模様の組子細工、茅葺き屋根、校倉造風壁板、ヤマザクラ類の樹皮を使った権細工の茶筒、白川郷の水車

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
情報誌 KOSMOS——こすもす
第14号
2024年11月12日発行

発行 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2番136号
TEL:06-6915-4500 FAX:06-6915-4524
URL:https://www.expo-cosmos.or.jp/

制作協力 株式会社ブックエンド
デザイン ごぼうデザイン事務所

©Expo'90 Foundation All rights Reserved